

ほめのジレンマと「ほめる根拠の提示」というほめ直しストラテジー

ーフェイスと会話分析の視点からー

趙文騰(北海道大学大学院生)

1. ほめのジレンマとほめ研究における課題

ほめ行動は人間関係の潤滑油であり(Wolfson, 1983), 肯定的な評価を与えることでほめられ側の認められたいという欲求(ポジティブ・フェイス, 以下 PF)を満たすことができる(Brown & Levinson, 1987). ほめ行動が行われた場合, ほめられ側の返答として, 同意することが選好されるが, その同意はほめられ側の自画自賛につながってしまう. したがって, ほめられ側はほめを受け入れるか, それとも自画自賛を避けるかという問題に直面する(Pomerantz, 1978). 本稿では, これを「ほめられ側のジレンマ」と呼ぶ. このように, ほめが常に受け入れられるとは限らない(張, 2014). ほめが受け入れられなかった場合, ほめ側はほめを続けるか否かという選択を行う必要がある. ほめを続けた場合, ほめられ側の PF を立てることができるが, 「過剰にほめることでむしろ相手に不快な思いをさせたり, 困惑させたり」(金, 2012:2), 逆にほめられ側に心理的負担をかける恐れがある. 本稿では, これを「ほめ側のジレンマ」と呼ぶ.

これまでのほめ行動に関する先行研究では, このような「ほめのジレンマ」の問題のうち, 主に「ほめられ側のジレンマ」に注目し, それがどのように解決されるかを明らかにすべく, ほめ返答に焦点を当てた分析を行ってきた. それに対し, 「ほめ側のジレンマ」を分析した研究は, 管見の限り張(2014)のみである. 張(2014)は, 「ほめに対して受け手は「ほめを受け入れるか受け入れないか」という問題に直面するが, 焦点を変えれば, ほめ手も受け手に「ほめが受け入れられるかどうか」という問題に直面する」と指摘し, 「ほめのジレンマ」はほめ側にもかかわることに言及している. しかし, 張(2014)は, ほめ行動における非言語的な要素の重要性に焦点を当てており, 「ほめ側のジレンマ」に対処する具体的なストラテジーを考察していない. 先行研究の課題として, 「ほめ側のジレンマ」に対して, ほめ側はどのようなストラテジーを取って対処するのかが明らかにされていないという点が挙げられる.

2. 本稿の位置づけ

以上を踏まえて本稿では, 「ほめ側のジレンマ」に注目し, 「フェイス」と会話分析の視点から, ほめられ側がほめを受け入れなかった¹後のほめ側の行動を分析した. その結果, ほめが受け入れられなかった場合, 「ほめ側のジレンマ」に対処する方法の一つとして, ほめ側は「ほめる根拠の提示」というストラテジーを用いることが明らかになった.

3. 事例と分析

本稿では, 国立国語研究所が公開している『日本語日常会話コーパス(ハードディスク版)』(以下, CEJC)を分析データとして用いる. 以下に2つの事例をそれぞれ「ほめ側のジレンマ」の産出と, それへの対処という2つの部分に分けて分析する. 3.1 では, 「ほめ側のジレンマ」がどう産出されたのか(事例1の断片1, 事例2の断片1)について記述する.

3.1 「ほめ側のジレンマ」の産出

事例1の夫1と妻1, 夫2と妻2はそれぞれ夫婦であり, 4人は夫婦1の自宅で飲みながら会話している. 断片1-1に至る前に, 4人は夫婦2の息子がアパートに住んでおり, 自炊しているという話をしている.

¹ 従来のほめ返答の研究では, 主にほめ返答を大きく「受け入れ」「否定」「回避」の3つに分けている. 本稿では, ほめが受け入れられなかったとは, ほめが否定されたことと回避されたことを指す.

【断片 1-1】(CEJC_S001-006) 息子

- 01 夫1: すごい賢そうな(0.8) [子でさ。
 02 妻2: [h° 全h 然° h.
 ((手を左右に振りながら話している))
 03 妻1: ほh んh と?
 ((夫1のほうに視線を向けながら話している))
 04 夫2: hhh

この断片では、ほめ側は夫1であり、ほめられ側は夫2と妻2である。01行目で夫1は息子をほめている。「すごい賢そうな」が産出され、0.8秒の間が空いた後、夫1は続けて発話の残りの部分を語ると同時に、妻2は手を左右に振りながら「全然」とそれを否定している(02行目)。妻1は夫婦2の息子に会ったことがなく、会話に参加するために必要な情報と背景知識を持っていないため(三牧, 2013:4-5)、「ほんと?」と相槌的に情報を確認している(03行目)。一方、もう一人のほめられ側である夫2はただ笑っており、ほめへの意見を明示していない(04行目)。このように、この断片では、ほめ(01行目)が受け入れられなかった。

事例2は、友人の3人が公園でお茶を点てながら会話している場面である。断片2-1の直前に、YはNが点てたお茶を飲んだ後、「お濃茶系な感じですね」とNに確認し、Nは「このぐらいが、僕がベストじゃないかってゆう、このお茶とこの茶碗で飲むのに」と意識的に濃茶を点てていることを伝えている。

【断片 2-1】(CEJC_T002_020) お茶

- 01 Y: このお茶ね: (0.7) 飲みやすいですね
 02 N: >飲み° やすい° <. あっ. ほんとう° です° か?
 ((Yのほうに視線を向けながら話している))

01行目で、Yは「飲みやすい」とほめている。それに対し、ほめられ側であるNはまず「飲みやすい」とやや速いスピードでYの発話の一部を繰り返してから、「あ」と発して「飲みやすい」(01行目)という新情報を受信できたこと、すなわち、自らの知識状態の変化を表している(Heritage, 1984)。続いて、Nは「ほんとうですか」とYのほうを見ながら、語尾を上げて語っている。このように、02行目の発話によって、Nは直前のほめを確認しつつ、ほめへの同意や否定等スタンスの表明を回避している。

以上のように、断片1-1と断片2-1では、ほめがうまく受け入れられなかった。これらの2つの断片が完了した時点で、ほめ側にとって、ほめを続けるかどうかという「ほめ側のジレンマ」が生じうる。なぜなら、1節で述べたように、ほめ続けるか否かはほめられ側のフェイスと密接に関係しているからである。ほめを続けた場合、ほめられ側のPFを立てることができる一方で、ほめられ側に心理的負担をかける恐れがある。したがって、ここでは、自らが直面する「ほめ側のジレンマ」に対して、ほめ側は何らかのストラテジーを取って対処しなければならない。

3.2 「ほめ側のジレンマ」への対処

この節では、2つの断片のそれぞれの続きを提示し、ほめ側はどのようにして「ほめ側のジレンマ」に対処するのかを記述する。

【断片 1-2】(CEJC_S001-006) 息子

- 05 夫1: あ. お世話になってますとか言ってたよ. [hhhhhh
 06 妻1: [h° h んh と?hhh
 07 夫2: 賢そうに見えるよ. 賢[そう:]に見える.
 08 夫1: [h かしこ:いよ.
 09 夫2: [そうゆう雰囲気.
 10 妻2: [h 全h 然だよね.
 ((手を左右で振り、夫2に視線を向ける))
 →11 夫1: あ. じゃあ僕はじゃ別にここら辺で失礼します:って.

12 妻1: [へ::hほんhと:?すごいねh

13 夫2: [そうゆうのはね(0.6)そうゆう:. なんとなく. そうゆうのはね. なんか. できる.

05行目で、夫1は息子の話を引用して「賢そう」というほめに対する証拠を加えている。それに対し、夫2は「賢そうに見える」の繰り返しによって返答している(07行目)。トランスクリプトを見る限り、夫2はほめを受け入れたように見えるが、音声上は、「そう」にアクセントが置かれ、賢そうに見えるだけで、本当は賢いかどうかは分からないというニュアンスが含まれている。言い換えれば、07行目の発話は、言語形式のみでは、ほめを受け入れていると認識できるが、音声情報を参照することによって、ほめを暗示的に否定していると言える。2回目の「賢そうに見える」が産出された時点で、夫1は再度ほめている。ほめ言葉を「賢そうな」から「かしこいよ」に変更していること、また、「こ」が長く延ばされて強調されていることから(08行目)、夫1はより断定的にほめていることが分かる。それにもかかわらず、妻2は手を左右に振り、視線を夫2のほうに向けながら、「全然だよな」(10行目)と夫2に確認を取る形でほめを打ち消している。それに続き、夫1は「僕はこちら辺で失礼します」という息子の(05行目と異なる)発話を引用し、再度「かしこい」の証拠を加えている(11行目)。それに対して、夫2はそれが何となくできるが、それ以外のことができるかどうかは分からないというニュアンスを伝え、暗示的に不同意を表している。

このように、断片1-2では、ほめ側はほめられ対象(息子)の発話、すなわち、事実を引用し、前に産出されたほめ(断片1-1の01行目、断片1-2の08行目)の根拠として提示している。このような根拠の提示は、次の断片2-2(断片2-1の続き)にも見られる。

【断片2-2】(CEJC_T002_020) お茶

→03 Y: うん. なんかあの:. なんだろう. (0.4)濃くしても:(0.7)苦味:
(Mのほうに視線を向けながら))

04 M: そんな[に.

→05 Y: [が. 来ないから.

06 M: [う:::ん.

07 N: [う:::ん:.

08 Y: 苦味が苦手な人こうゆうのですね
(両手で茶碗を持ち、茶碗を軽く上下に動かす))

09 N: あっ. なるほどなるほど.

「ほんとうですか」(断片2-1の02行目)という質問に対して、Yは「うん」と肯定してから、続けて発話権を取って「濃くしても苦味がこないから」(03, 05行目)とお茶の口当たりを説明し、飲みやすさの根拠を伝えようとしている。このほめの根拠を聞き、MとNは同時に「うん」と長く延ばして相槌的な返答を行っている(06, 07行目)。それに続き、Yは茶碗を軽く上下に動かし、このお茶は飲みやすいが、苦味が苦手な人が飲めないという経験を伝えている(08行目)。すなわち、Yは08行目をもってほめる根拠の追加をやめ、少し話題をずらして単なるお茶の知識を2人に説明している。Nは09行目でこの新たな知識への納得を表している。

ここで、注目すべき点は2点ある。1点目は、Yが発話する際に、ほめられ側でもほめ側でもなく、ただの会話参加者(第三者)であるMのほうに視線を向けている点である。03, 05行目の発話は、Nに対するほめ(01行目)への説明であるため、ほめられ側であるNのほうを見たほうが自然だと考えられるだろう。なぜYはNに目を向けるのかについて、本稿では、Yは第三者に向けてほめる根拠を提示し、第三者からの同意を得ることで、自らのほめられ側に対する評価についての同意者を増やしたいからだと考える。

2点目は、03行目の発話に非流暢さが観察される点である。具体的には、「なんかあの」「なんだろう」という前置きと、それぞれ0.4秒と0.7秒の沈黙が挙げられる。このような非流暢さの産出について、本稿では2つの可能性を考えた。1つ目は、Yはこのお茶の飲みやすさを説明するための言葉を探しているからである。3人の少し前の発話を聞くと、NとMはそれぞれの茶道歴は2回しかなかったのに対し、Yは4年ぐらいの茶道歴があることが分かる。つまり、お茶に関してYのほうがより多くの専門知識と情報を持っているはずである。Yにとって、お茶にあまり詳しくない2人に適当な言葉を選んで説明し、分かってもらうことが課題となる。したがって、このような非流暢さは、Yが説明の言葉を探すための時間稼ぎであると言える。2つ目は、Yがこのお茶の飲みやすさを説明することでほめ行動を続けるかどうか悩んでいるという可能性である。このお茶の飲みやすさを説明し続けることは、Nをほめることに

つながる。02 行目で N によって一度回避されたほめを続けるか、それともそれ以上説明をせず、ほめをやめるかという「ほめ側のジレンマ」に直面しているため、すぐに反応できず、躊躇いながらターンを取った可能性がある。

このように、断片 2-1 では、ほめ側は第三者への視線や非流暢さの産出という複数のストラテジーを取りながら、自らが持っているお茶に関する専門知識と経験を用いてお茶の飲みやすさを説明し、前のほめ(断片 2-1 の 01 行目)の根拠を提示している。

3.3 分析

以上の事例では、ほめが受け入れられなかった後、ほめ側はそれぞれ事実(事例 1)、専門知識(事例 2)をほめの根拠として提示し、ほめを続けるかどうかという「ほめ側のジレンマ」に対処していた。本稿では、このようなストラテジーをほめ直しのストラテジーの 1 つと考え、「ほめる根拠の提示」と呼ぶ。このような「ほめる根拠の提示」は、以下の 2 つの理由により、「ほめ側のジレンマ」にうまく対処することができる。

第一に、「ほめる根拠の提示」は、直接的なほめではないにもかかわらず、前に行ったほめには根拠があることを示すことで、そのほめの確かさと信頼性を強めることができるからである。具体的には、事例 1 の息子の実際の発話や、事例 2 のお茶に関する知識と経験の提示によって、先のほめには理由があり、心からほめていることが伝えられる。このように、「ほめる根拠の提示」では、ポジティブな評価語が使用されていないにもかかわらず、前のほめを補強して間接的にほめられ側の PF を立てていると言える。

第二に、「ほめる根拠の提示」はほめ側が何らかの情報をほめられ側に伝える形であるため、ある程度ほめ自体と切り離されている。そのため、ほめられ側にとっては、返答する際に、ほめへの同意や否定等の意見を表明する必要はなく、これらの「根拠」(事実、専門知識)への意見(聞き取れたかどうか、同意するかどうか)を表明すれば良い²。したがって、「ほめる根拠の提示」が産出された場合、ほめられ側にとっては、「ほめられ側のジレンマ」に直面することがないため、返答する際の心理的負担が軽減される。

4. おわりに

本稿では、「フェイス」と会話分析の視点から、これまでの先行研究では議論されてこなかった「ほめ側のジレンマ」に対処するストラテジーを実際の事例をもとに考察した。その結果、「ほめる根拠の提示」はほめ直しストラテジーの 1 つとして、間接的にほめられ側の PF を立てるとともに、ほめられ側の心理的負担を緩和するため、「ほめ側のジレンマ」にうまく対処していることを明らかにした。ただし、以上の結果は限られたデータから導かれたものである。今後、さらにデータを増やし、今回の分析の妥当性を検証していく必要がある。また、事例 2 には、ほめ側が第三者に発話を宛てることによってほめ直す様子が観察されたが、本稿ではこれについて詳しく検討することができなかった。今後、第三者への発話も含めて「ほめ側のジレンマ」に対処する他のストラテジーを分析していきたい。

参考文献

Brown, P., & Levinson, S. (1987).

Politeness: Some universals in language usage. Cambridge: Cambridge University Press.

Herbert, R. (1989).

The ethnography of English compliment and compliment responses. In Oleksy, Wieslaw (Ed.), *Contrastive Pragmatics*. Amsterdam: John Benjamins.

張承姫(2014). 会話参加者の立場から分析する「ほめ」と「ほめの応答」—会話分析手法を用いた日韓ほめの分析 言語コミュニケーション文化 11(1), 135-148.

金庚芬(2012). 日本語と韓国語の「ほめ」に関する対照研究 ひつじ書房

Pomerantz, A. (1978).

Compliment responses: Notes on the cooperation of multiple constraints. *Studies in the organization of conversational interaction*. 79-112. New York: Academic Press.

Wolfson, N. (1983).

An Empirically based analysis of complimenting in American English. *Sociolinguistics and Language Acquisition*. 82-95. Rowley, MA: Newbury House.

三牧陽子(2013). ポライトネスの談話分析—初対面コミュニケーションの姿としくみ— くろしお出版

² 実際にも、これらの 2 つの事例において、「ほめる根拠の提示」が完了された後、ほめられ側はそれぞれほめる根拠への意見を示して発話順番を取っている(断片 1-2 の 13 行目、断片 2-2 の 07 行目)。